

Title	1950年6月の北朝鮮による韓国侵攻とその後の米国による介入についての一考察
Sub Title	An observation on the North Korean invasion against South Korea of June, 1950 and the countering U.S. intervention
Author	斎藤, 直樹(Saito, Naoki)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2011
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 (The Hiyoshi review of the humanities). No.26 (2011.) ,p.115- 142
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20110531-0115

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

1950年6月の北朝鮮による韓国侵攻と その後の米国による介入についての一考察

齋藤直樹

This article is designed to examine the processes how the Kim Il-sung leadership attempted to implement the military invasion against South Korea of June, 1950, and the invasion was subsequently countered by U.S. intervention.

はじめに

- (1) 朝鮮人民軍の侵攻
- (2) 米軍の介入
- (3) 朝鮮人民軍の攻勢と釜山橋頭堡の戦い
- (4) 仁川上陸作戦と米軍の反攻
- (5) トルーマン・マッカーサー会談とさらなる北進

はじめに

本稿は、1950年6月25日に金日成に率いられた朝鮮人民軍が韓国に軍事侵攻したのに対し、米国が韓国防衛を掲げ大規模介入に踏み切った6月下旬から中国人民志願軍の大軍が10月19日に朝鮮出兵を企てるまでの過程を考察する。

(1) 朝鮮人民軍の侵攻

1950年6月25日の夜明けの午前4時であった。軍事境界線の北緯38度線

付近では引切り無しに雨が降り続いていた。突然、静寂さを切り裂くように猛烈な砲撃が始まった。その中を膨大な数の朝鮮人民軍兵士が軍事境界線を突破し、韓国領内に雪崩れ込んだ⁽¹⁾。人民軍の侵攻戦力は約90000人の歩兵部隊、約240両もの戦車車両、約180機の航空機から編成された。

これに対し、8個師団からなる韓国軍の半数に当たる4個師団が軍事境界線付近に展開していた。しかし日曜日の夜明け前ということもあり、守備態勢についていたのは4個師団の内、わずかに三分の一に過ぎなかった。見事に不意を衝かれた韓国軍には逃げ出すものや、投降するものなどが続出した。

この間、米政府の情報機関は金日成の韓国侵攻計画に向けての動きの探知に完全に逸していた。マッカーサー（Douglas MacArthur）連合国軍総司令部総司令官の配下のG-2情報機関は軍事境界線付近での人民軍の動きについての情報をそれなりに掴んでいたが、いつもどおりの宣伝戦であるとして深刻には捉えなかった⁽²⁾。これを受け、マッカーサー自身もまたのことかと別段、気にかけていなかった。またかりに人民軍が軍事侵攻を企てたとしても、韓国軍は首尾よくこれに対応できるとみた楽観的な観測もあった。こうした中で、的確に人民軍の侵攻準備を予想していたのがCIAであったが、トルーマン政権はそうした情報を深刻に取り上げなかった。こうしたことから、侵攻事件の勃発はトルーマン政権にとってまさ

(1) 朝鮮人民軍の侵攻について、Dennis Wainstock, *Truman, MacArthur, and the Korean War*, Chapter 1: Invasion and Response, (Greenwood Press, 1999.) p. 15.; Roy E. Appleman, *South to the Naktong, North to the Yalu, United States Army in the Korean War*, Chapter III: Invasion across the Parallel, (Washington D.C., 1961.) pp. 21-28.; and James F. Schnabel, *United Army in the Korean War, Policy and Direction: The First Year*, Chapter IV: The Communist Challenge, Center of Military History, United States Army, Washington, D.C., (1992.) p. 61.

(2) 侵攻の兆候を見逃した情報機関と政権の不手際について、*op. cit.*, *Truman, MacArthur, and the Korean War*, Chapter 1: Invasion and Response, pp. 17-18.; and *op. cit.*, *United Army in the Korean War, Policy and Direction: The First Year*, Chapter IV: The Communist Challenge, pp. 61-63.

しく「寝耳に水」とも言うべき事態であった。

人民軍による大規模の軍事侵攻を知ったムシオ (John Muccio) 駐韓・米大使は、攻撃の規模とその方法からして全面的な軍事侵攻であることは疑う余地はないとの衝撃的な内容を直ちにアチソン (Dean Gooderham Acheson) 国務長官に打電した⁽³⁾。1950年1月のナショナル・プレスクラブでの演説で、アチソンはかりに朝鮮半島で軍事衝突が発生したとしても、韓国は米国による防衛ラインの外に位置すると語っていた。しかも朝鮮人民軍による韓国への侵攻はありそうにもないと、その可能性を6月20日にアチソンは下院で否定したばかりであった⁽⁴⁾。

週末にミズーリ州インデペンデンスの自宅で家族と共に寛いでいたトルーマン (Harry S. Truman) にアチソンから急を告げる電話がかかった。米中部時間の24日土曜の晩9時20分であった。大統領に深刻な報告があると前置きし、北朝鮮が韓国を侵攻したようだとアチソンはトルーマンに伝えた⁽⁵⁾。

トルーマンに事件を直ちに国連安保理事会に付託することをアチソンは進言した⁽⁶⁾。1949年に国連主催の総選挙を通じ建国に至った国家である韓

(3) 北朝鮮による韓国侵攻を伝えるムシオの電報について、Robert J. Donovan, *Tumultuous Years: the Presidency of Harry S. Truman, 1949-1953*, Chapter 19: A Summer Day in Independence, Missouri, (Columbia : University of Missouri Press, 1996.) p.191.

(4) アチソンの議会発言について、Woody Klein, *All the Presidents' Spokesmen Spinning the News-White House Press Secretaries from Franklin D. Roosevelt to George W. Bush*, Chapter 1: Hotwar, (Praeger, 2008.) p.52.

(5) アチソンからのトルーマンへの報告について、*op. cit.*, *Truman, MacArthur, and the Korean War*, Chapter 1: Invasion and Response, pp. 19.; and *op. cit.*, *Tumultuous Years: the Presidency of Harry S. Truman, 1949-1953*, Chapter 19: A Summer Day in Independence, Missouri, p.191. 国務省からトルーマンへの電報について、“Telegram, dated June 24, 1950, from U.S. State Department to President Harry S. Truman regarding reports of North Korean forces invading the Republic of Korea.” *Papers of Harry S. Truman: President's Secretary's Files*.

(6) アチソンの進言について、*op. cit.*, *Truman, MacArthur, and the Korean*

国が侵略されるという事態に及んだ経緯を踏まえると、安保理事会への案件の付託は極めて自然な流れであると思われた。それだけでなく、米軍は48年にわずかの数の軍事顧問団を残して韓国から全面的に撤退しており、また25000人程度の脆弱な韓国軍では一挙に雪崩れ込んできた9万人もの朝鮮人民軍に対応できる余裕はなく、このままでは一気に韓国が制圧される恐れがあった。その意味で、とにかくにも安保理事会の開催が急務であった。

トルーマンは翌日、当時修復中であったホワイトハウスに代わるブレアハウスへ向かった。この侵攻事件は45年4月に急遽米大統領に就任して以来幾度となく危機を乗り越えてきたトルーマンにとって最大の試練となった。

このとき、トルーマンやアチソンなど政権幹部の認識は、朝鮮人民軍による大規模軍事侵攻はスターリン (Josef V. Stalin) による直接的な指示の下で行われたというものであった⁽⁷⁾。少なからず及び腰であったスターリンを金日成が周到に説得する格好で侵略計画に巻き込んだのが実際であったが、政権幹部はこのときそうした実情を知る由はなかった。そしてこうした理解に立つ以上、もしも韓国への侵略行為といった事態を黙認してしまえば、スターリンはその触手を周辺のアジア諸国へも伸ばすことは必至で、周辺諸国は次から次へと侵略の餌食となり、共産化されかねない。トルーマンは侵略事件を世界的な共産主義の膨張の一環として米ソ間、東西間の冷戦構造の図式で捉え、朝鮮半島全域が共産化するという事態を断固阻止する以外に方策はないと判断した。しかも、侵略を阻止すると共に撃退するための集団的安全保障機構として国連が創設された今、国連の集

War, Chapter 1: Invasion and Response, pp. 19.; and *op. cit.*, *Tumultuous Years: the Presidency of Harry S. Truman, 1949-1953*, Chapter 20: Sunday Night Blair House, p.192.

(7) 韓国侵攻はスターリンの指示によるものだとトルーマンの認識について、*op. cit.*, *Tumultuous Years: the Presidency of Harry S. Truman, 1949-1953*, Chapter 21: The Commitment of U.S. and Naval Forces, p.208.

团的安全保障の実施という形で対応できるはずだと、トルーマンは判断したのである⁽⁸⁾。

6月25日に終日続いたブレアハウスでの政権幹部の会談で、トルーマン政権の当面の対応が決まった。一つ、軍事物資を韓国へ直ちに供給すること。一つ、韓国へ調査隊を派遣すること。一つ、米第七艦隊をフィリピンから台湾海峡へ移動させること。一つ、米空軍は極東ソ連軍の空軍基地への爆撃準備を行うこと。一つ、国務省と国防省はスターリンが繰り出す次の一手を読むこと。一つ、韓国在住米市民の避難の確保のため、ソウル、金浦、仁川を防護する必要がある、このため空軍および海軍を緊急に出動させることなどであった⁽⁹⁾。これらの指令は直ちにマッカーサーに伝えられた。これにより、米軍は45年8月以来、始めて戦闘体制に入った。トルーマン政権幹部達にとって気がかりであったのは世論と米議会がどのように反応するかであったが、事態の緊急性を踏まえ、米議会と国民に事態の進捗に周知させることは後でもよいとの結論に至った。

(2) 米軍の介入

しかも切迫した事態の下で、米議会による武力行使の授権を求めることなく、トルーマンは直ちに安保理事会に侵攻事件を付託した。ところで、安保理事会での中国代表権を持つのは中華民国ではなく中華人民共和国で

(8) 国連の集団的安全保障で侵攻事件に対処するとのトルーマンの判断について、Statement, dated June 26, 1950, from President Harry S. Truman announcing that it will be the policy of the United States to support the effort of the U.N. Security Council to put an end to the North Korean invasion of South Korea. Papers of Harry S. Truman: President's Secretary's Files; and *op. cit.*, *Truman, MacArthur, and the Korean War*, Chapter 1: Invasion and Response, pp.19-20.

(9) トルーマン政権の当面の対応の決定について、*op. cit.*, *Truman, MacArthur, and the Korean War*, Chapter 1: Invasion and Response, p. 19; and *op. cit.*, *Tumultuous Years: the Presidency of Harry S. Truman, 1949-1953*, Chapter 20: Sunday Night Blair House, p. 199.

あると断じ、ヤコブ・マリク (Jacob Malik) ソ連国連代表は安保理事会会合を50年1月10日から欠席していた。

問題は6月25日に緊急招集された安保理事会へマリクが出席するのかどうか、もし出席すれば、どのような行動に打って出るのか、トルーマン政権にはなんの確証もなかった。もしもマリクが拒否権を発動しようものならば、安保理事会の審議は阻止される危険性があった。ところが、マリクは安保理事会に姿をみせなかった。スターリンがマリクの出席を止めたのである。スターリンの脳裏をよぎったのは、もしもマリクが出席しようものならば、拒否権を発動するといった強硬な措置をとらざるをえない。そうでなければ、社会主義圏の盟主としての威信は地に落ちかねない。しかし拒否権を行使すれば、国連の枠外での強硬路線に米国を追い込み、その結果、米ソ間の緊張は沸点へと一気に高まりかねない。その先にあるのは米国による大量の原爆投下という悪夢の可能性であった。49年8月にソ連も原爆を開発したとはいえ、当時は保有数で大きく水を開けられていた。この可能性をスターリンは極度に恐れたのである。

このため、ソ連が行ったのもっぱら決議採択への外交批判であった。安保理事会での決議採択には5つの常任理事国による全会一致の支持が不可欠な要件であるとし、ソ連が支持しない以上、決議採択は無効であると決議の違法性を強く非難した。議論としては極めて全うなものであった。決議の違法性の問題は確かに存在し、これは今日に至るまで安保理事会決議採択に纏わる問題の一つとされてきた¹⁰⁾。とはいえ、理事会でのソ連代表の不在は不可思議な印象を与える行動であった。もしも決議の採択にソ連が不服であれば、常任理事国として拒否権をソ連代表は行使すべきであったのであり、反対に揚げ足を取られる格好になった。ところが、もう一つの側面があった。50年1月から欠席戦術を続けていたことはスターリン

(10) 決議83を巡る国際法上の問題点について、例えば、Leo Gross, "Voting in the Security Council: Abstention from Voting and Absence from Meetings," *The Yale Law Journal*, Vol. 60, No. 2 (February, 1951), pp. 209-257.

にとってみればむしろ好都合なことであった。何故ならば、もしも6月25日に限り突如、ソ連が欠席戦術に訴えたのであったならば、北朝鮮という同盟国を助けられない国家として、これまた社会主義圏の同盟諸国から批判をかう恐れがあったからである。

この結果、ソ連代表によって妨害されることなく採択されたのが安保理事会決議82であった⁽¹⁾。同決議は朝鮮人民軍の侵攻を「平和の破壊」であると断罪すると共に、両軍に対し直ちに戦闘を終止し、朝鮮人民軍は北緯38度線へと退却すること、状況を監視し安保理事会に報告する機関として朝鮮国連委員会を設置すること、これを達成するために国連を支持すると共に加盟国は北朝鮮へのすべての支援の提供を控えることなどを骨子としていた。

6月27日にトルーマンは共和党と民主党の議会指導者達と会い、政権の決意を伝えると共に国民に事態の進捗とそれへの対応を伝えることを決めた⁽²⁾。会談で、米政府が毅然とした対応を取らなければならないこと、韓国軍はひどく狼狽している李承晩（イ・スンマン）指導部の下に置かれていること、西欧の同盟諸国はスターリンの指示の下で侵略が断行されたものとして捉え、それゆえに激しく動揺しており、米国の対応を静観しているとトルーマンは明らかにした。このとき、米議会の当初の反応は悪くはなかった。またメディアもトルーマンの行動は米国民の大部分からも支持を受けた⁽³⁾。

(1) 安保理事会決議82の採択について、Resolution, dated June 25, from United Nations Security Council calling for North Korea to withdraw its forces to the 38th parallel and for hostilities between North and South Korea to cease. Papers of Harry S. Truman: President's Secretary's Files.

(2) トルーマンと議会指導者達の懇談について、*op. cit.*, *Tumultuous Years: the Presidency of Harry S. Truman, 1949-1953*, Chapter 21: The Commitment of U.S. and Naval Forces, p. 208.

(3) この点について、*op. cit.*, *Tumultuous Years: the Presidency of Harry S. Truman, 1949-1953*, Chapter 21: The Commitment of U.S. and Naval Forces, p.209.

トルーマン政権は侵攻への対応措置について国連安保理事会へ付託すると共に、直ちに米海軍と米空軍の出動に傾いた。この事態を深刻と捉え、韓国防衛のため軍事介入をトルーマンが決断したとき、金日成が想定していた事態、つまり米軍による大規模介入はありえないと踏んだ見通しは空虚な願望に終わったことになる。また金日成の巧みな口車に言いくるめられたスターリンと毛沢東も最も警戒していた米軍の大規模介入といった事態への対応に迫られることになる。

続いて6月27日の安保理事会に二つ目の決議83が採択された⁽¹⁴⁾。これは韓国への軍事支援を提供するようすべての加盟国に勧告する内容を盛り込んだものであった。スターリンの外交戦術は前回と同様であった。マリクはまたしても不在であった。しかし今度は、ソ連の動きをトルーマン政権はひどく警戒していた。というのは、もしも今度こそマリクが理事会に出席し、拒否権を行使するといった挙に出たのであれば、拒否権のない総会へ審議の場を移し、三分の二の多数決をもって決議を採択することも政権は視野に入れなければならなかった。ただし、総会での審議に時間が浪費され、挙句の果てに結論が出た頃には韓国政府が制圧されてしまう危険性があった。他方、拒否権による安保理事会の審議打ち切りを受け、国連の枠外で一方的に米国が立ち上がることになれば、友好的な加盟国からの賛同も失いかねないため、これもまた得策とはいえなかった⁽¹⁵⁾。

この間、トルーマン政権にとって焦眉の課題は韓国在住の米国民の身の安全の確保であり、韓国制圧の阻止であった。安保理事会決議83に従い、トルーマンは6月28日までに米空軍と海軍の緊急出動をマッカーサーに指

(14) 安保理事会決議83の採択について、Resolution dated June 27, 1950, from United Nations Security Council recommending that the members of the United Nations furnish assistance to the Republic of Korea in order to repel the attack and restore peace and security in Korea. Papers of Eben A. Ayers.

(15) この点について、*op. cit.*, *Truman, MacArthur, and the Korean War*, Chapter 1: Invasion and Response, p. 25.

示した⁽¹⁶⁾。その眼目は米国民が安全に避難できるように空中支援を行うと共に、韓国軍の建て直しのために軍事物資を提供することであった。しかし、空軍と海軍の出動によっても事態の改善が見込めないとすれば、次の一手をトルーマンは考えなければならなかった。実際に突進を続ける朝鮮人民軍の南進を止めることができなかった。朝鮮人民軍空軍機はソウル近郊の金浦国際空港に爆撃を加えた。6月28日午後にはソウルはあえなく陥落した⁽¹⁷⁾。

この間も韓国軍はずるずると南方へ後退を続けた。6月26日に水原（スウオン）を視察したチャーチ（John H. Church）調査団団長は北韓38度線以北へ人民軍を追いやるには米地上軍の大規模派兵が不可欠となるとマッカーサーに報告した⁽¹⁸⁾。危機感を抱いたマッカーサーは自身の目で前線を確認するのを感じた。翌日、東京を飛び立ったパターン号は水原に降り立った。そこからマッカーサー一行はソウル近郊までジープで移動し、激しい砲撃によって破壊され濛々と煙が立ち込めるソウルの町並みを眺めた。ソウルはすでに人民軍の手に落ちていた。難を逃れようとする数千人の人の群れ、一斉に退却する韓国軍の有様を目の当たりにしたマッカーサーは緊急に地上軍を派兵しないかぎりすべては手遅れになると確信した⁽¹⁹⁾。

(16) トルーマンの指示について、Statement, dated June 27, 1950, by President Harry S. Truman, announcing his order to send U.S. air and naval forces to help defend South Korea and explaining the rationale for his decision. Papers of George M. Elsey; and *op. cit.*, *Truman, MacArthur, and the Korean War*, Chapter 1: Invasion and Response, p. 22.

(17) ソウルの陥落について、*op. cit.*, *Truman, MacArthur, and the Korean War*, Chapter 1: Invasion and Response, p. 25.

(18) チャーチ報告について、*op. cit.*, *Tumultuous Years: the Presidency of Harry S. Truman, 1949-1953*, Chapter 21: The Commitment of U.S. and Naval Forces, p. 210.; and *op. cit.*, *Truman, MacArthur, and the Korean War*, Chapter 1: Invasion and Response, p. 26.

(19) マッカーサーの確信について、*Tumultuous Years: the Presidency of Harry S. Truman, 1949-1953*, Chapter 21: The Commitment of U.S. and Naval Forces, p. 211.; and *op. cit.*, *Truman, MacArthur, and the Korean War*,

マッカーサー曰く、25000名程度の韓国軍ではとても人民軍による攻勢に太刀打ちできない。このままでは、韓国の崩壊は時間の問題であり、これを阻止する唯一の方策は米地上軍の大規模派兵しか残されていない。もし権限が付与されれば、直ちに在日米進駐軍の一部を派遣し、早期の反攻に打って出たいとマッカーサーはトルーマンに願い出た。大量の米軍が対日占領軍として日本に進駐していたことで、韓国への大部隊の派遣の展望が開けた。

マッカーサーの申し出を受け、このまま手をこまねいていたのでは韓国は遠からず制圧され、朝鮮半島全域が共産主義者の手に落ちるといった認識を政権の幹部達も共有した。6月30日、トルーマンは釜山防衛のためにマッカーサーに韓国への地上軍の派遣の権限付与を行った²⁰。

しかしこのとき政権を混乱させるもう一つの動きがあった。安保理事会決議83の採択を受け、血気盛んな台湾の蒋介石指導部から33000名の地上軍を韓国防衛のため出兵させたいとの申し出があった²¹。蒋介石にも目算があった。韓国出兵を通じ北朝鮮の制圧に貢献することになれば、その勢いで中朝国境から中国本土へ攻め上り、あわよくば、中国共産党を放逐するというのがその狙いであった。しかも、台湾の中華民国政府は国連安保理事会の常任理事国の地位を占めていたことから、他の加盟国の派遣を受け入れ、中華民国政府の派遣を拒否するのでは辻褄が合わない。とはいえ、もしも蒋介石軍の出兵を許諾すれば、毛沢東をひどく刺激することは避けられそうもない。これにより、侵攻事件が中華人民共和国と中華民国の間

Chapter 1: Invasion and Response, p. 26.

²⁰ マッカーサーへの権限付与について、*Tumultuous Years: the Presidency of Harry S. Truman, 1949-1953*, Chapter 22: Truman's Fateful Decision: Ground Forces in Asia, p.215.

²¹ 蒋介石からの申し出について、*Tumultuous Years: the Presidency of Harry S. Truman, 1949-1953*, Chapter 21: The Commitment of U.S. and Naval Forces, p. 213.; and *op. cit.*, *Truman, MacArthur, and the Korean War*, Chapter 1: Invasion and Response, p. 26.

の衝突へ飛び火する可能性が極めて高い。そうなれば、中国人民解放軍が介入することは明らかであり、トルーマンにとってこれはなんとしても回避しなければならない事態であった。6月30日、トルーマンは蒋介石政府が申し出た韓国出兵を婉曲に拒否する方針を決めた²²⁾。他方、台湾の防護を固める必要があり、台湾海峡への第七艦隊の出動を命じ中華民国の防護に当たることが決まった。

他方、米メディアは直ちにトルーマンが地上軍の派遣方針の確定を報じた。大なり小なり、派遣は不可避という見方がメディアでも支配的であった。この間、米国内の世論もトルーマンによる地上軍の派遣方針を好意的に受け入れた。他方、韓国への地上軍の派遣の前に米議会から承認を得なかったことは、厳しい批判にさらされる可能性があった。そこで、トルーマンは民主と共和の両党の大物議員をホワイトハウスに招き政権の講じた対応の説明を行うと共に理解を求めた²³⁾。その席上、安保理事会決議83に従い、軍事上必要とあれば、北朝鮮の軍事目標への空爆のために米空軍の使用を認め、朝鮮半島全域の海上封鎖を指示した。

30日午後、統合参謀本部からマッカーサーに対し地上軍の派遣についての権限付与が伝えられた。しかし武力行使の権限付与についてトルーマンがとった行動は米議会の存在を無視した嫌いがあった。米憲法第1条8項によれば、戦争を宣言する権限を持つのは議会であることから、トルーマンのとった行動は少なからず違憲性の強い行動であった。反発の声はすぐに上がった。その急先鋒に立ったのが共和党の重鎮のタフト (Robert A. Taft) 上院議員であった。タフトは1月12日のナショナル・クラブでのアチソン演説を槍玉に上げ、あのような無責任な発言こそ北朝鮮による軍事

22) トルーマンの断りについて、*Tumultuous Years: the Presidency of Harry S. Truman, 1949-1953, Chapter 22: Truman's Fateful Decision: Ground Forces in Asia*, pp.216-217.

23) トルーマンと議会関係者達の会談について、*Tumultuous Years: the Presidency of Harry S. Truman, 1949-1953, Chapter 22: Truman's Fateful Decision: Ground Forces in Asia*, p. 217.

侵攻を招いたとして、アチソンの辞任を声高に要求した²⁴⁾。

(3) 朝鮮人民軍の攻勢と釜山橋頭堡の戦い

ところが、トルーマンやマッカーサーの青写真を狂わしたのは想定をはるかに上回るほど強固な朝鮮人民軍の勢いであった。最初に前線に投入されたのが、隊長のチャールス・スミス (Charles Bradford Smith) に因んで「スミス機動部隊 (Task Force Smith)」と呼称された在日米進駐軍の陸軍第24師団 (the U.S. Army's 24th Infantry Division) の一部隊であった。1945年8月の日本の敗戦に伴い進駐した米兵は平和で長閑な日本で安穩とした占領任務にあたっていた。その中には、実戦経験のない新兵が多数含まれ、ほとんどが10代の若者達であった。それがゆえに兵士達の速度も低く、またその装備も決して十分ではなかった。その彼らが突然、朝鮮半島での実戦に借り出されることになった。7月1日に釜山に到着したスミス機動部隊は大田 (テジョン) を経て7月5日に烏山 (オサン) に向かった。これに対し、水原から烏山に進んだ朝鮮人民軍第4師団がスミス部隊と出くわした。人民軍第4師団による攻勢を受け、大敗を喫したスミス部隊は撤退に追い込まれた²⁵⁾。同じく、烏山で朝鮮人民軍は韓国軍第17連隊を撃破した。猛進する人民軍の前に韓国軍も米軍も歯が立たなかった。

24) タフトによる猛烈な批判について、*Tumultuous Years: the Presidency of Harry S. Truman, 1949-1953, Chapter 23: A Costly Mistake: War without Congressional Approval.*, pp. 220-221.; Robert Alphonso Taft, Clarence E. Wunderlin, *The Papers of Robert A. Taft: 1949-1953*, Chapter Four: July-December 1950, (The Kent State University Press, 2006.) p. 232.; and Gary R. Hess, *Presidential Decisions for War: Korea, Vietnam, and the Persian Gulf*, Introduction: Presidential Decision and International Crises, (The Johns Hopkins University Press, 2001.) p. 34.

25) 「スミス機動部隊」の韓国派遣と敗退について、*op. cit.*, *South to the Naktong, North to the Yalu*, Chapter VI: American Ground Forces Enter the Battle, pp. 59-76.; and Brian Fitzgerald, *The Korean War: America's Forgotten War*, Chapter One: A Fast Path to War, (Minneapolis, Minn.: Compass Point Books, 2006.) pp.23-24.

勢いづいた人民軍は釜山に向けて南進を続けた。

他方、7月7日開催の安保理事会で三つ目の決議84が採択された。決議84は前述の決議83に従い加盟国が提供する戦力は米国の統一指揮の下に入ることを要求した²⁶⁾。この決議84に従い、急遽、編成された米軍指揮の「朝鮮国連軍（“the U.N. Forces in Korea”）」が韓国防衛の任にあたることになった。安保理事会での決議の採択を通じ「朝鮮国連軍連」を編成すると共に、在日進駐軍を「朝鮮国連軍」の中核部隊として派遣する格好は整ったことになる。また決議83に従い、15の加盟国が韓国防衛に戦力を提供することを明らかにした。7月11日にマッカーサーに朝鮮国連軍最高司令官という新たな肩書きが加わった。

後退を余儀なくした韓国軍とウォーカー（Walton Harris Walker）中將指揮の米第8軍は7月の終わりまでに朝鮮半島の南東部に位置する釜山市の周りの狭い地域に追い込まれた。釜山港の回りに防衛線を築き、防衛線を死守することをウォーカーは決意した。これが釜山橋頭堡（プサンきょうとうほ）の戦いである。

このときまでに朝鮮人民軍の実効支配地域は韓国領土の9割にも及んだ。残りの1割の占める狭い領域に追い込まれた韓国軍と国連軍の背後には日本海を残すのみであった。韓国軍にとってももちろんのこと、米軍にとっても退却という選択肢はなかった。7月29日にウォーカー司令官が「固守するか、それとも死ぬか（Stand or die.）」と米第25師団の兵士達に向かい檄を飛ばしたのはこのときである²⁷⁾。

このとき、人民軍による朝鮮半島の武力統一は時間の問題にみえた。以前、スターリンとの会談で金日成は3日間で韓国を制圧すると大見得を切

26) 安保理事会決議84の採択について、United Nations Resolution concerning the Complaint of Aggression upon the Republic of Korea, Dated July 7, 1950. Papers of Eben A. Ayers.

27) この点について、25th Div WD, G-3 Jnl, 29 Jul 50, Div Historian's Notes; Barth MS, p. 9. (cited in *op. cit.*, *South to the Naktong, North to the Yalu*. Chapter XII: The Front Line Moves South, pp. 207-208.)

った。これはさすがに無理であったが、国連軍の衣をまとった米第8軍の各部隊が急遽、駆けつけたにも関わらず、戦局は日々悪化を辿っていた。このとき、金日成は朝鮮解放5周年日にあたる50年8月15日までに宿願は達成できると確信していた²⁸⁾。しかし釜山橋頭堡の戦いは米軍・国連軍と韓国軍による必死の抵抗により、膠着状態へと陥った。しかもこの間、日本の補給基地から前線の釜山に兵員と軍事物資が間断なく送り込まれた。これに伴い、戦局は大きく動きかけていた²⁹⁾。

ソ連製の戦車など装備を備え電撃侵攻を通じた緒戦の打撃には優れているものの、戦域の拡大と戦闘の長期化に伴い食糧や物資の補給が次第に手詰まりとなる深刻とも言える弱点を朝鮮人民軍は抱えていた。釜山攻略作戦の下で国連軍と韓国軍を釜山に追い込んだものの、北朝鮮から韓国北部を経て東南部の釜山を繋ぐ人民軍の補給線はすでに間延びした感があり、一度補給線が寸断されるような事態になれば、逆に一気に窮地に立たされかねない状況であったのである。

この間、毛沢東や中国共産党幹部達は釜山攻略作戦に内在した危うさを正確に感じ取っていた。長期にわたった国共内戦と抗日戦争を戦い抜いた歴戦の兵達であった毛沢東達にしてみれば、金日成達による侵攻作戦は真にお粗末かつ危ういものであった。そうした危うさに気づいた毛沢東達は様々な接触を通じ警鐘を鳴らし続けた。最初の機会は侵攻からわずか一週間後の7月2日に遡る。同日、周恩来はロシュチン (Roshchin) 駐中国・ソ連大使との会談で、金日成が米軍による軍事介入が差し迫っていたという毛沢東の警告を無視し続けたと前置きし、米軍が仁川 (インチョン) などの上陸し一気に北進する危険性があるとの予測を披露し、米軍による上陸

28) 金日成の確信について、Shen Zihua, "Sino-North Korean Conflict and its Resolution during the Korean War," *Cold War International History Project Bulletin, Issue 14/15* (Winter 2003/Spring 2004) p. 11.

29) 8月から9月にかけての増援活動について、*op. cit.*, *South to the Naktong, North to the Yalu*, Chapter XXI: August Build-up and September Portents, pp.376-396.

作戦を阻止するためには仁川港周辺の防御を固める必要があると進言した³⁰⁾。

しかも7月末までに米軍・国連軍と韓国軍を釜山の一角に追い込んだものの、米軍の徹底抗戦を受け前線が膠着状態に陥った間、間断なく米軍側の補給が続いた。中国情報機関による急を告げる情報を前に毛沢東と党幹部達は米軍の急襲作戦は差し迫っているとの危機感を強めた。

金日成に警告を発する必要があると判断した毛沢東は8月から9月の初めに金日成の密使である李 (Lee Sang Cho) に警告した³¹⁾。毛沢東は金日成の冒した作戦上の誤りを鋭く突いた。毛沢東曰く、釜山を包囲する格好で広範な前線で人民軍が攻めたてているが、それへの補給態勢が十分とは言えない。特に予備戦力が不足した状態では、前線の背後を米軍に突かれる危険性がある。特に仁川からソウルに至る地域、また南浦 (ナンポ) から平壤に至る地域を米軍が急襲する危険性があることを踏まえ、釜山から人民軍を一旦退却させ、これらの地域の防御を緊急に行わないといけないと。

これと並行する形で、9月4日に周恩来の特使の柴 (Chai Chengwen) が金日成と接触を図った。釜山攻略作戦の戦局の行き詰まりを指摘されると、まもなく局面は打開できると金日成は反論した。そこで、前線の背後への米軍による上陸作戦の危険性に対し備えはあるのかと問い正すと、米軍の増援能力には限りがあるから上陸作戦に打って出ることにはできないとし、米国の反攻は恐れるに足らないと金日成は断じた³²⁾。そして9月10日に柴は改めて金日成に一時的な撤退を図るべきではないのかとの周恩来の忠告を進言すると、撤退など一度として考えたことはないかと金日成はぶっ

30) 周恩来・ロシュチン会談について、*op. cit.*, “Sino-North Korean Conflict and its Resolution during the Korean War,” p. 10.

31) 毛沢東の忠告について、*op. cit.*, “Sino-North Korean Conflict and its Resolution during the Korean War. p. 10. また毛沢東や党幹部達はソ連当局者に接触を続けた。8月19日と28日にイデン (Pavel Yudin) ソ連軍事顧問との会談で、米軍の増援部隊が続々と投入されれば、人民軍の対応は困難を極め、遠からず中国からの支援が必要となるとの認識を毛沢東は披露した。

32) 9月4日の会談について、*op. cit.*, “Sino-North Korean Conflict and its Resolution during the Korean War. p. 11.

きら棒に言い返した³³⁾。撤退の助言など、自信満々の金日成にとって大きなお世話以外の何ものでもなかったのである。

(4) 仁川上陸作戦と米軍の反攻

毛沢東や中国共産党幹部達が察していた金日成達の作戦上の瑕疵をマッカーサーが見逃すはずもなかった。毛沢東達が案じ始めた当初から、マッカーサーは仁川港への水陸合同上陸作戦計画の決行を認め始めた。ソウル近郊に位置する仁川港へ上陸作戦を敢行し、釜山に兵力を集中させる朝鮮人民軍の背後に一気に回り込むことで、北朝鮮と韓国領内に侵入した人民軍の補給路を寸断すると共に、釜山攻略に奔走している人民軍を釜山の一角に釘付けに出来るはずだとマッカーサーは考えていた³⁴⁾。

このように考えたマッカーサーは侵攻直後から統合参謀本部にその承認を求めていた。しかし配下の司令官達を除けば、マッカーサーに共鳴する者は皆無に等しかった。実際に上陸作戦には少なからずリスクが伴った。もしも上陸作戦に成功すれば、釜山橋頭堡で韓国軍と米軍・国連軍を包囲した朝鮮人民軍を切り崩し、ソウル奪還に向けて展望が一気に開けることは見解の一致するところであった。とはいえ問題は山積していた。いかなる上陸作戦にも地勢的条件、自陣の準備、敵の守備態勢などに由来する様々なリスクが付きまとう。しかも仁川上陸作戦に伴う条件の悪さとリスクの高さには尋常でないものがあつた。なによりも障害となるのは仁川港への進入をふさぐ格好で立ちはだかる月見島(ウオルミド)の存在であつた。月見島の守備隊を短時間で撃破しないかぎり、仁川上陸作戦に黄色信

33) 金日成の回答について、*op. cit.*, "Sino-North Korean Conflict and its Resolution during the Korean War. p. 11.

34) マッカーサーの仁川上陸作戦の立案について、*op. cit.*, *South to the Naktong, North to the Yalu*. Chapter XXV: The Landing at Inch'on, pp.488-492; and *op. cit.*, *United States Army in the Korean War: Policy and Direction: The First Year*, Chapter VIII: Operation Chromite: The Concept and the Plan, pp. 139-154.

号が点る。また守備隊を容易く撃退しても、仁川港を囲む湾の入り口が極めて狭いため、多数の艦艇が一気に進入することは難しく上陸に手間がかからざるをえない。さらに潮位が引き起こす問題も憂慮された。仁川沿岸では満潮時と干潮時の潮位が著しく異なり、干潮時には大型艦艇が浅瀬に乗り上げるとも限らない。これだけ悪条件が重なる上陸作戦では、一つ歯車が狂うものならば、完全な破綻に帰す恐れがあった。そして万が一上陸作戦に躓くことがあれば、米軍・国連軍と韓国軍はいよいよ崖っぷちに追い込まれかねない。とても賛同できないとみる向きが統合参謀本部の多数意見であった。これに対し、当のマッカーサーは上陸作戦に伴うリスクの一つや二つは百も承知であり、そうであるからこそ逆に油断している敵の守備態勢に穴があるのであり、それを巧みに突くことで活路は一気に開けるとして譲らなかった。あまりの一徹なマッカーサーの主張に統合参謀本部も根負けした。統合参謀本部はついに上陸作戦を了承した。9月8日のことであった³⁵⁾。

仁川港への水陸合同上陸作戦のために編成されたのが米第10軍 (the X Corps) であった³⁶⁾。司令官に選任されたのはマッカーサーの信認の厚いアーモンド (E. M. Almond) 海兵隊少将であった。米第10軍の中核部隊は第1海兵連隊 (the 1st Marine Division) と陸軍第7歩兵師団 (the Army's 7th Infantry Division) からなる7万名にあり、これに韓国軍の8600人が加わった。上陸作戦には約230隻もの艦艇が動員された。作戦名はクロマイト作戦 (Operation Chromite) と命名された。米第10軍が上

35) 上陸作戦への統合参謀本部の批判と最終的な承認について、*op. cit.*, *South to the Naktong, North to the Yalu.* Chapter XXV: The Landing at Inch'on, pp. 492-497.; and *op. cit.*, *United States Army in the Korean War: Policy and Direction: The First Year*, Chapter VIII: Operation Chromite: The Concept and the Plan, pp. 139-154.

36) 上陸作戦の作戦準備について、*op. cit.*, *South to the Naktong, North to the Yalu*, Chapter XXV: The Landing at Inch'on"pp.489-492.; and *op. cit.*, *United States Army in the Korean War: Policy and Direction: The First Year*, Chapter IX: Operation Chromite: The Forces, pp. 155-172.

陸作戦を敢行した後、釜山の守備に当たっている米第8軍を北進させ、これら二大戦力を持って韓国領内の朝鮮人民軍の残党を挟み撃ちにする。とはいえ、上陸作戦はマッカーサーにとっても国連軍にとっても大きな博打であった。

上陸作戦の目標日の9月15日までに米軍機は仁川市に徹底的な空爆を加えた。15日の早朝、コルセア機は月見島の人民軍守備隊に対し激しい機銃掃射を浴びせた。その間に、第1海兵連隊と第5海兵連隊が素早く上陸し、約500名の守備隊を撃破した。午後まで月見島は陥落した。これにより第一難関は突破した。この間、仁川市内への激しい艦砲射撃と戦闘機による機銃掃射が続いた。仁川には約1500名の人民軍兵士が待ち構えた。これに対し、第1海兵連隊と第5海兵連隊が仁川に上陸し、夜半までに仁川を攻略した。この間、マッカーサーはマッキンレイ山号船上から直接、指揮を取った³⁷⁾。

米第10軍は見事に人民軍の反撃を封じ仁川を制圧した。仁川の制圧に続き、金浦空港をまもなく第5海兵連隊が確保した。この間、釜山攻略に向けて前のめりの格好で攻め立てていた人民軍の補給線を背後から寸断し、人民軍を釜山に釘付けることができた。何千人もの人民軍兵が捕虜となった。また残党の一部は山中へ逃走した。これに伴い、釜山防衛から開放された米第8軍は一路、ソウルを目指し北進を開始した。

仁川上陸作戦という博打はマッカーサーの完勝とでた。国連軍側の損害は最小にして、朝鮮人民軍に多大な損害を与えると共に、人民軍に優位に傾いていた戦局を完全に覆すことができた。上陸作戦での圧勝は作戦が抱えた諸々のリスクを包み隠すのにあまりあるもので、マッカーサーにかねがね批判的であった人々の声を押し黙らされた。他方、予想をはるかに上回った上陸作戦の成功に酔いしれたマッカーサーはこれ以降、ますます自信過剰となり、トルーマン政権だけでなく、軍部内の慎重な意見に耳を貸

³⁷⁾ 仁川上陸作戦の挙行について、*op. cit.*, *South to the Naktong, North to the Yalu*. Chapter XXV: The Landing at Inch'on, pp. 497-509.

さず、ますます独断的かつ専行的となる。これが相手側の作戦能力を著しく過小評価すると共に自らを誇大評価することにつながる。仁川で金日成の油断と隙を鋭く突くことができたマッカーサーは最終的に自らも墓穴を掘ることにつながるという皮肉な事態を生むのである。

他方、釜山攻略のために南東部に進撃した朝鮮人民軍はその背後から補給路を遮断され、一気に窮地に陥った。続いて、ソウルの攻防が焦点となった。多くの慎重論をねじ伏せて断行した仁川上陸作戦を見事に成功させたマッカーサーは、スレッジハンマー作戦の名称の下で、ソウル奪還に向け大規模な反攻に出た。9月26日に始まったソウルの市街戦は3日間に及んだ。人民軍も必至の抵抗をみせたものの、28日までにソウルは奪還された³⁸。約2万5000から3万の人民軍兵士は北緯38度線に向けなりふり構わず敗走した。29日には李承晩ら韓国政府の幹部達もソウルに帰還した。同日、ソウル近郊でまだ散発的に戦闘が続く中、マッカーサーは李承晩に統治権を手渡した。

敗残兵のごとく人民軍が北緯38度線以北へ雪崩を打って退却したことで、侵攻前の現状は回復された。これにより韓国の防衛を確保するとした当初の安保理事会決議の目標は見事に達成された。立場を入れ替える格好で、韓国軍と米・国連軍に朝鮮半島の武力統一という展望が開けることになった今、現状の回復で満足できた人がどれだけいたであろうか。北緯38度線を突破し北進すべきかどうか。6月25日以来、戦局は重大な局面を迎えたのである。

ここで立ち止まるなどマッカーサーの頭には微塵もなかった。作戦への最終的な承認の権限を持っていたのは統合参謀本部であった。38度線の突破と北進に向け権限の授権を巡り、マッカーサーと統合参謀本部の綱引きが始まった。

9月27日にマッカーサーは今後の作戦についての指令を統合参謀本部か

³⁸ ソウルの奪還について、*op. cit.*, *South to the Naktong, North to the Yalu*, Chapter XXVI: The Capture of Seoul, pp. 515-541.

ら伝えられた。マッカーサーの任務は朝鮮人民軍の壊滅にあり、北緯38線以北での軍事作戦の継続を承認する内容であった。しかしそれには付帯条件がついた。その条件とは、北朝鮮領内へ大規模な中国軍あるいはソ連軍が介入していない場合か、あるいは介入に向けて意思が表明されていない場合に限り、北進が認められる。ただしいかなる状況下でも、国連軍は中朝国境とソ連・北朝鮮間の国境を越境してはならず、韓国軍を除きソ連との近接地域や満州との近接地域に進撃してはならないものとする³⁹⁾。その上で、参謀本部は38度線以北での作戦行動計画について明らかにするようマッカーサーに指示した。

この間、マッカーサーの思惑は北進による事態の悪化を懸念するトルーマンによる政治介入の余地を最小限にすることにあった。北緯38度線を突破する前に、トルーマンによる特別の承認を必要としないよう参謀本部へマッカーサーは願い出た。人民軍が降伏勧告に従い降伏しなかったならば、38度線の突破とその残党の殲滅を許可していただきたいとマッカーサーは申し出たのである⁴⁰⁾。

29日にマーシャル (George Catlett Marshall) 国防長官は個人的な伝言としてマッカーサーに伝えた。38度線以北での作戦行動は自由にやってもらいたい⁴¹⁾。38度線の突破と北進について権限がマッカーサーに授権され

(39) マッカーサー宛ての統合参謀本部の伝達について、JCS 92801, 27 Sep 50, Personal for MacArthur, from JCS to CINUNC, (cited in *op. cit.*, *South to the Naktong, North to the Yalu.* Chapter XXIX: The Plan for Complete Victory, p.607.)

(40) マッカーサーの申し出について、*op. cit.*, *South to the Naktong, North to the Yalu.* Chapter XXIX: The Plan for Complete Victory, p.608.

(41) マーシャルの回答について、JCS 92985, 29 Sep 50, Marshall to MacArthur: JCS 90975, JCS to CINCFE, 29 Sep 50, Memo for Secy Def from Bradley, Chmn, JCS, 29 Sep 50; S. Comm. on Armed Services and S. Comm. on Foreign Relations, 82d Cong., 1st Sess., 1951, Joint Hearings, Military Situation in the Far East, pt.1, pp. 245, 339-40, and 488, Testimony of Marshall. (cited in *op. cit.*, *South to the Naktong, North to the Yalu.* Chapter XXIX: The Plan for Complete Victory, p.608.)

たことは明白であった。マーシャルへの回答で、敵が降伏するまで作戦行動は続けると、マッカーサーは10月1日に断じた。10月2日12時、マッカーサーは米・国連軍の全軍に一般指令を発した⁽⁴²⁾。

6月27日の安保理事会決議83にしたがい、軍事作戦は韓国の軍事緊急事態への対処と韓国領内だけに限定されたが、マッカーサーにとって北緯38線に軍事的な意味など存在はしなかった。マッカーサー曰く、敵を屈服させるため、いつでも軍事境界線を越えることができる。10月1日の無条件降伏を金日成が受諾しなければ、朝鮮半島のどこに潜もうと、敵軍を見つけ出し、殲滅するのみである⁽⁴³⁾。

マーシャルの伝言に先立つ統合参謀本部がマッカーサーに発した付帯条件には重大な矛盾が隠れていた。というのは、参謀本部による付帯条件に示された事態とは今、行われようとしている国連軍の北進によって引き起こされる事態であった。9月29日に統合参謀本部は曖昧な文言を残しながらも、マッカーサーの北進計画に許可を与えた。10月1日は重大な転換点となった。

中国やソ連による大規模の軍事介入の可能性に気を揉んだトルーマンは戦局を十分に注視するようマッカーサーに幾度となく注意を喚起した。しかし、トルーマンの警鐘にマッカーサーは上の空であった。マッカーサーの楽観主義に多くのものが踊らされていた。中には、その危うさに気づいていたものもいれば、それをあえて指摘するものもいたが、マッカーサーの置かれた地位や仁川上陸作戦の華々しい成功の前に誰もが沈黙を守った。北進に纏わる諸々の危うさは覆い隠されることにつながったのである。

(42) マッカーサーの一般指令について、Msg C65034, CINCFE to DA for Secy Def, 30 Sep 50, and Msg C65035, CINCFE to CC Eighth Army, 30 Sep 50, (cited in *op. cit.*, *South to the Naktong, North to the Yalu*, Chapter XXIX: The Plan for Complete Victory, p.608.)

(43) この点について、Msg C65118, CINCUNC to DA, 1 Oct 50, (cited in *op. cit.*, *South to the Naktong, North to the Yalu*, Chapter XXIX: The Plan for Complete Victory, p. 608.)

マッカーサー同様に、北進に人一倍、強い執念と情念を燃したのが李承晩であった。スターリンや毛沢東のおかげで朝鮮半島の武力統一という願ってもみない機会が金日成に訪れたとすれば、侵略軍を韓国領内から放逐した今、願ってもみない機会が訪れたのは李承晩であった。国連軍が北緯38度線を突破するしないにかかわらず、韓国軍は38度線を突破し、北進を続ける。韓国軍の進撃が止まるのは鴨緑江に到達するときであるというのが李承晩の持論であった。9月19日の釜山での市民集会で李承晩は、「我が国に敵兵が一兵たりともいなくなるまで、満州との国境まで兵を挙げなければならぬ」と、力説した。かりに国連軍が38度線で進撃を止めたとしても、「自分達が止まるつもりはない」と言い切った⁽⁴⁴⁾。9月29日、北進統一の実現に向けて李承晩は丁一権（チョン・イルグォン）韓国軍参謀総長に北進を下命した。これを受け、9月30日、敗走を続ける朝鮮人民軍を追いかけるように、韓国第一軍団第三師団が38度線を越境した。韓国軍が38度線を突破したのと機を合わせる形で、マッカーサーは10月1日に金日成に対し武装を解除し戦闘を終止するよう無条件降伏を突きつけた⁽⁴⁵⁾。しかし金日成からの回答はなかった。

北緯38度線の突破に向け準備態勢が整う中で、司令官の間では別の問題が表面化した。ソウル奪回に向け米第10軍が米第8軍に合流したとき、ウォーカー米第8軍司令官は今後、米第10軍は米第8軍の指揮の下で、米・国連軍全軍が統一指揮下で作戦行動を行うべきであると強く考えるようになった。すなわち、アーモンド指揮の米第10軍を配下に置き、両軍で38度線を突破し、一気に平壤を叩くと共に北朝鮮の制圧に向けて北進すべきであるのがウォーカーの自説であった⁽⁴⁶⁾。

(44) 李承晩の演説について、FEC, CofS files, Associated Press dispatch from Pusan, 1450 19 Sep 50. (cited in *op. cit.*, *South to the Naktong, North to the Yalu*, Chapter XXIX: The Plan for Complete Victory, pp. 614-615.)

(45) 10月1日のマッカーサーによる無条件降伏勧告について、*op. cit.*, *South to the Naktong, North to the Yalu*, Chapter XXIX: The Plan for Complete Victory, p.609.

このように考えたウォーカーは9月26日付書簡でマッカーサーに米第10軍を米第8軍へ編入させたい旨の要望を婉曲的に伝えた。これに対し、翌日、米第10軍はあくまで総司令部隷属の予備戦力であると断じ、ウォーカーの希望を一蹴した⁽⁴⁷⁾。絶対的な上司の命令にはウォーカーはしぶしぶ従わざるを得なかった。しかし、米第8軍と米第10軍の二大戦力をあえて分散させるとするマッカーサーの作戦計画では著しく弱体化した朝鮮人民軍を攻め立てるには十分であったかもしれないが、後に20万もの中国人民志願軍の兵力に遭遇した際にこの作戦の問題が一気に表出することになるのである。

(5) トルーマン・マッカーサー会談とさらなる北進

自信に満ちたマッカーサーはウォーカーや腹心のアーモンドを初めとする司令官達に北鮮制圧計画を提示した。マッカーサーの制圧計画は、米第8軍が北緯38度線を突破し一路平壤に向けて北進を続ける一方、アーモンド指揮の米第10軍が元山（ウォンサン）への水陸合同上陸作戦を敢行し、北東方面から平壤へ進撃する。これら二大戦力が人民軍の残党を壊滅させ、戦争を終わらせるであった。敗残兵のごとくひたすら敗走する人民軍の有様に照らし、この作戦は遠からず果たされるかにみえた。続いて10月9日、マッカーサーは金日成に対し降伏するよう最後通牒を突きつけた。それに対し10日、金日成が降伏を断固拒絶したことを平壤ラジオ放送は伝えた⁽⁴⁸⁾。

(46) ウォーカーの考えについて、*op. cit.*, *South to the Naktong, North to the Yalu*, Chapter XXIX: The Plan for Complete Victory, p. 609.

(47) この点について、Msg CX64410, 27 Sep 50, CINCFE to CG Eighth Army, and Msg G25090KG, ; and CG Eighth Army to CINCFE, 26 Sep, (cited in *op. cit.*, *South to the Naktong, North to the Yalu*, Chapter XXIX: The Plan for Complete Victory, p.609.)

(48) マッカーサーによる最後通告と金日成による拒絶について、Dept of State Pub 4015, app. A, United Nations Command Seventh Report to the Security Council, United Nations, 1-15 October 1950. (cited in *op. cit.*, *South to the Naktong, North to the Yalu*, Chapter XXIX: The Plan for Complete Victory,

同日、米第8軍の各部隊は38度線を突破し、北進を始めた⁴⁹⁾。他方、米第10軍の各部隊は平壤攻略に向けた上陸作戦のために、仁川港から海軍艦艇に乗り込み、北朝鮮北東沿岸の元山港に向け移動を開始した⁵⁰⁾。すべてが順調であった。

とはいえ、戦域の拡大を強硬に要求するマッカーサーの言動はトルーマンや政権幹部にとって気がかりでであった。マッカーサーに任せておけば、大規模の中国軍の介入を招き、戦局は予想もできない局面へと一変させかねない可能性があった。このため急遽持たれたのが10月15日の太平洋上のウェーク島でのトルーマンとマッカーサーの会談であった⁵¹⁾。トルーマンにはブラッドレー（Omar Bradley）統合参謀本部議長、ジェサップ（Philip C. Jessup）大使、ハリマン（W. Averell Harriman）大使、ラスク（Dean Rusk）国務次官補らが同行した。マッカーサーにはホイットニー（Courtney Whitney）少将、ラドフォード（Radford）提督らが同行した。

マッカーサーが披露した展望は恐ろしく楽観的なものであり、相変わらずのマッカーサー節であった。マッカーサー曰く、朝鮮人民軍の残存兵力は10万人程度にすぎず、装備、速度、指揮面などで著しく劣っている。朝鮮人民軍はいまや、絶望的な戦闘を強いられており、人民軍による抵抗は11月23日の感謝祭までには終わるであろう。続いてマッカーサーは元山港

p. 609.)

(49) 米第8軍の北進について、*op. cit.*, *South to the Naktong, North to the Yalu*, Chapter XXX: Eighth Army and X Corps Enter North Korea, pp. 622-631.

(50) 元山上陸作戦に向け移動を開始する米第10軍について、*op. cit.*, *South to the Naktong, North to the Yalu*, Chapter XXX: Eighth Army and X Corps Enter North Korea, pp. 631-633.

(51) ウェーク島会談について、*op. cit.*, *United States Army in the Korean War: Policy and Direction: The First Year*, Chapter XI: The Invasion of North Korea, pp. 210-214.; and Richard Halworth Rovere and Arthur M Schlesinger, *General MacArthur and President Truman : the Struggle for Control of American Foreign Policy*, Documentary Material I. Text of the Truman-MacArthur Wake Island Conference, (New Brunswick, N.J. : Transaction Publishers,1992.) pp. 253-263.

に上陸予定の米第10軍が1週間で平壤に到達する作戦に打って出ることを明らかにした。9月15日の仁川上陸作戦とこの作戦を重ね合わせ、仁川で起こったことがこの作戦でも起こるとマッカーサーは断言した。これに対し、中国人民解放軍の軍事介入の可能性が気になるトルーマンがマッカーサーに対し問質すと、可能性は皆無に等しいとマッカーサーは回答した。マッカーサーによれば、中国軍が朝鮮人民軍による侵略に手を貸す機会はすでに失われた。満州には30万人の兵力が展開し、鴨緑江沿いには10万から12万5千人の兵力が展開する。その半分の5万から6万の兵力が鴨緑江を渡る可能性があるものの、この動員力では明らかに限界があり、国連軍の北進にとって何の妨げにもならない。そして何よりも中国軍の致命的弱点はこれといった空軍力を保有しないことにあるとマッカーサーは力説し、もしも中国軍が平壤の奪回を目論んだとしても、米軍機による激しい爆撃と機銃掃射に曝され、最大級の虐殺が起こるであろうと、マッカーサーは断じ、中国の朝鮮出兵に纏わるトルーマンの不安を一蹴したのである。

マッカーサーがトルーマンやブラッドレーに披露した言及は二重の意味を持つ。朝鮮人民軍の抵抗が11月23日までに終わるといっことは的を射ていた一方、中国志願軍の戦力を著しく過小評価していた。その背景には、マッカーサーの手元に届いた中国軍についての情報の不正確さに加え、マッカーサーの相変わらずの楽観主義が事態の正確な把握を鈍らせ、判断を狂わせることにつながった。このとき出兵を直前に控えていた20万もの中国人民志願軍の兵力はマッカーサーがトルーマンに示した5、6万という数字よりはるかに大きいものであった。さらに自国にこれといった空軍を持たず、ソ連軍機による航空支援もなしに大量の地上軍を送り込むなど、いくら毛沢東と中国共産党幹部達が勇猛果敢とはいえ、あまりに無謀であり蛮勇ともいえる行動であり、マッカーサーだけでなく誰からみてもとても想定困難な事態であった。

この間、トルーマンの前で吹聴したマッカーサーの楽観主義を裏付けるかのように、平壤の攻略は眼前に迫っていた。38度線を突破して北進した

米第8軍と韓国軍は19日に平壤の攻略に打って出た。20日までに平壤はあえなく陥落した⁵²。これを契機として、人民軍は雪崩を打って瓦解した。13万5000名もの人民軍兵士は投降し、人民軍の指揮系統も分裂状況に陥った。人民軍の残存兵力はわずかに三個師団に過ぎなかった。

19日に金日成は平壤を脱し、地下に潜伏した。ここで軍配はすでに決した感があった。他方、平壤は攻略したとはいえ、10月1日から毛沢東指導部が繰り返してきた中国による介入の可能性についてトルーマンと政権幹部は危惧の念を払拭することはできなかった。これに対し、北朝鮮制圧への確信を一層深めたマッカーサーはその心配は杞憂に過ぎないとして、ウエーク島で行った確約を繰り返した。

マッカーサーの楽観主義に躍らせたかのように、10月の終わりまで戦争は圧勝で終わるとの楽観的な見方が国連軍の司令官達の間で急速に広がった。こうした楽観主義を映し出すかのように、戦後を睨んでの準備が始まった。米第8軍帰属の各部隊を米国や欧州の同盟諸国への配置転換の計画の立案作業も始まった⁵³。この間、米軍兵士達は意気揚々としていた。気の早い者達は11月23日の感謝祭には東京での戦勝祝賀パレードを思い描き、クリスマスにはクリスマス・ショッピングを楽しむつもりであった。

上述の9月27日の統合参謀本部指令では、国連軍の進撃ラインの北限は

52) 平壤の攻略について、*op. cit.*, *South to the Naktong, North to the Yalu*, Chapter XXXI: The Capture of P'yongyang, pp. 638-653. and Stanley Sandler, *The Korean War: No Victors, No Vanquished*, Chapter 6: UNC Drive North, (Routledge, 1999.) p. 104.

53) 米第8軍の配置換え計画について、*op. cit.*, *South to the Naktong, North to the Yalu*, Chapter XXXIII: The Chinese Intervene, p.669. また戦後の韓国復興を念頭に、マッカーサーとウォーカーは第8軍に民政支援指揮署 (Civil Assistance Command) を設置の準備を命じた。10月30日にウォーカーは11月1日までの設置に間に合うよう161人職員と117人下士官によって編成される指揮署を立ち上げた。この点について、EUSAK WD, G-3 Sec, 30 Oct 50: Ibid., G-1 Sec, Civil Assistance Stf Sec Rpt, 1 Nov 50. (cited in *op. cit.*, *South to the Naktong, North to the Yalu*, Chapter XXXIII: The Chinese Intervene, p. 670.)

中朝国境から50キロから60キロ・メートルも南方であり、鴨緑江までの進撃が許諾されたのは韓国軍のみであった⁵⁴。ところが、10月17日にマッカーサーは独断で国連軍作戦指令第4号を発令し、米・国連軍の全軍をさらに北進させる体勢を講じた⁵⁵。そして10月24日、マッカーサーはそれまでの北進進撃の規制ラインを撤廃し、米・国連軍全軍に向け北進の北限を中朝国境朝とすると司令官達に下命した。これにより、鴨緑江に向けての米・国連軍全軍の進撃が可能となった。これは事実上、北朝鮮制圧に向けての総攻撃を意味するものであった⁵⁶。

マッカーサーの指示に驚いた統合参謀本部は9月27日の本部発令指令に反するのではないかと異議を表明し、釈明をマッカーサーに求めた⁵⁷。これに対し、マッカーサーの回答は規制ラインの撤廃は軍事上、必要となったと実にそっけないものであった。当面する状況に韓国軍では対処不可能であることを念頭に置き、従前の参謀本部指令の権限の中で指令を発令できること、加えてこれはウェーク島での合意に即していると感じるとマッカーサーは断言した⁵⁸。参謀本部は9月27日の指令への違反であると疑義

54) この点について、Schnabel, FEC, GHQ Support and Participation in the Korean War, ch. VI, pp. 31-32, citing Msg CX66705, CINCUNC to all comdrs, 17 Oct 50, and CX66839, CINCUNC to all comdrs, 19 Oct 50. (cited in *op. cit.*, *South to the Naktong, North to the Yalu*, Chapter XXXIII: The Chinese Intervene, p.670.)

55) この点について、*op. cit.*, *South to the Naktong, North to the Yalu*, Chapter XXXIII: The Chinese Intervene, p. 670.

56) 10月24日の米・国連軍司令官達への命令について、Msg CX67291, CINCUNC to all comdrs, 24 Oct 50. (cited in *op. cit.*, *South to the Naktong, North to the Yalu*, Chapter XXXIII: The Chinese Intervene, p. 670.)

57) 統合参謀本部による異議の表明について、*op. cit.*, *South to the Naktong, North to the Yalu*, Chapter XXXIII: The Chinese Intervene, p. 670.

58) マッカーサーの回答について、C67397, CINCFE to JCS, 25 Oct 50; Senate MacArthur Hearings, MacArthur's Testimony, pp. 97-98; Gen. of the Army Omar N. Bradley's Testimony, pt. I, p. 757, and Gen Collins' Testimony, pt. 2, pp. 1216-17, 1229-30, 3235, 1239-41, 1312-13. (cited in *op.cit.*, *South to the Naktong, North to the Yalu*, Chapter XXXIII: The Chinese Intervene, p.670.)

を挟んだものの、取り立ててマッカーサーの行動を止めようとはしなかった。これにより、米第8軍の各部隊は鴨緑江への進撃が認められた。

この間の10月26日、米第10軍第1海兵隊師団はこれといった抵抗も受けることなく北朝鮮東部沿岸の元山港へ上陸作戦を敢行した⁵⁹。マッカーサーが当初練り上げた北進計画では米第10軍が米第8軍と合流し、平壤を攻略する予定であったが、米第10軍の元山上陸前に平壤はすでに陥落していた。上陸後、米第10軍の各部隊は直ちに進撃を開始した。この間、先陣を切って韓国軍が猛然と中朝国境を目指し突進していた。これに米第8軍の各部隊が続いた。クリスマス前に米兵が帰郷できるとした展望は日々、現実味を帯びはじめた。北朝鮮の制圧はいよいよ時間の問題に思われた。

ところが、これに先立つ10月19日に20万もの中国人民志願軍の大軍が鴨緑江を渡っていたのである⁶⁰。

⁵⁹ 米第10軍の元山陸作戦について、*op. cit.*, *South to the Naktong, North to the Yalu*, Chapter XXX: Eighth Army and X Corps Enter North Korea, pp. 635-637.

⁶⁰ 中国人民志願軍の鴨緑江の渡河について、*op. cit.*, *United States Army in the Korean War: Policy and Direction: The First Year*, Chapter XIII: The Chinese Take a Hand, pp.233-234.